

僧伽藍 Samkaram

奇異に聞こえるかもしれないが、薄羽蜉蝣うすばかげろうが地に墜ちて地面に与える衝撃と、峯から岩石が崩落して麓に与える衝撃に差異はない。

もし私があなたの手を触れるか触れないかの距離で優しく撫でたら痒いかもしれない。もし誰かが手で打てば痛いだろう。その差異が生じるのは衝撃に強弱という差異があるからだろうか。あるいは大小の差異があるからだろうか。

人は刺激を脳で解析し、そのデータは海馬体等をめぐり、感情が生じる。生まれた感情は長期記憶などにもなる。そのときに働くのが神経伝達物質である。興奮性のグルタミン酸、抑制性 γアミノ酪酸、モノアミン神経伝達物質と言われるドーパミンやらノルアドレナリンやセロトニン、他多数ある。モノアミン神経伝達物質は情動を生起せしめる大脳辺縁系 (limbic system) など、脳内のたくさんの部位に影響する。

強度の衝撃を痛みと感じ、微弱な衝撃を痒みと感ずるのは、脳が衝撃の強弱等を解析し、痛みや痒みを創るからである。

脳が衝撃の強弱等を捉えられるのは、衝撃に強弱等の差異があるからではなく、身体に先天的に事象を分別する基準が設定されているからである。強弱も硬軟も冷暖も鋭鈍も軽重も脳が創る。

それまでは無色透明。いや、無色透明も脳が創ったものだ。すべては concept だし、concept でなければ表象しない。

しかし左のごとき反論が想定される。
曰く「いや、そんなことはあるまい。
現に現象が起こるじゃないか。

たとえば蚊蜻蛉が墜ちても地面は見た目に何も変わらないが、岩が落ちれば地は凹み、周囲にあつたものが破壊される」と。

しかしそれを差異として捉えるのは脳が創る、と言え、いや、そうじゃなくて、現に原となる差異があるから、必然に迫られて、脳は強弱を創作したのでは……しかしそういう解釈は脳が創っている。

差異は concept によるものであり、強弱大小等々は一切が concept である。
物理的に差異があつても、差異ではない。差異が差異になるのは差異という concept があるからである。

つまり客観的事象的に、物理的な差異があつても、それは無色透明なのである。いや、無色透明ですらない。

理解のために敢えて誤解を恐れず言えば、そういうことだ。

「じゃ、脳は零から強弱や冷暖を創っているのですか？」

無ですらない無から脳はすべてを創る。すべては内側にあり、そこから生まれている。外的要因はない。それはあたかも時空のない「ところ」から宇宙が生じたようなものである。

「そこまでは言い過ぎじゃないですか？ そんなことがどうやって確かめられるのでしょうか？」

と言うか、それも脳が創っているんじゃないんですか？ 何だか、自分でも、いったい、何を言っているのかわからなくなってしまうかもしれませんけど・・・」

隆臥はふつと鼻先で笑った。

「未だ遂げず、収まらず、だね。」

しかし^{おお}竟らないってことは^お𠄎（甲骨文字『羊』、この場合は「美、善い、^{よい}善い、^{よい}善い」という意味）^{こと}とき。

良いことは大事だ。

正しく生きなければ、頸木に繋がれた牛が牽く重荷の車輪が深い轍を残すように、苦しみが魂を抉る。

自らが魂魄の奥底から、一点の疑念もなく清明で、正しいと思えることを、^{ひたすら}只管実践すべきなのだ」

「はい、それはもう、よくわかっていますよ」

早蕨はそう応えた。

東京にある某大学で御用達の時計店に勤務する彼は久々に真神郡の実家に帰って来ていたのだ。そして龜鹽湖畔の貸家に住む先輩、^{たかふし}隆臥を訪問しているというわけである。

その貸家は茅葺平屋の古い農家で、電気もガスも引かず、湖から溝で水を引いて洗いに使い、煮焚きは竈に薪であった。とは言え、隆臥は大家である隣家の老夫婦からいつも食事を頂戴して暮らしている。

時折洗いの水路を蛙が泳ぐ。

晴耕雨読という言葉があるが、隆臥は天気がいいと本を読み、天気が悪いと暗くて読めないで散歩に出た。雨が好きなせいもある。

早蕨は土間のかまちに座って、汗を拭き続けた。

「それにしても、梅雨なのに暑いですね。いや、気温は低いんでしょうね。ただ、湿度が。」

雨が来そうですね」

「実は最近、レフ・トルストイの名作『戦争と平和 (Война и мир)』を読んでね。それでこんなことを考えてしまったんだよ」

「と、唐突ですね。で、読んだって…今頃ですか」

「むろんさ。アンドレイ・ニコラーエヴィチ・ボルコンスキイ公爵が瀕死の状態になるんだが」

「…会話繋がってないし、関連性もよく見えないんですけど」

「知らないかね」

「いや、その場面は知っています。ナターシャに会えたんですよ。息子にも」

「そう。妹にもね。」

しかしアンドレイはもう妹にも、かつて愛したナターシャにも、自分の息子にも関心がないんだ。

そういったものはすべて、何でもないもの、つくられたもの、かたちだけのもの、『ごっこ』みたいにみんなでそうだと信じているからそうなっているだけのものだ、ってね。

死の深淵の傍に立って、アンドレイはそういう境地に至っちゃうんだよ」

「そこは隆臥くん個人の感想でしょう」

「まあ、そうなんだが。」

彼はそれを彼女たちに説明しようとするが諦める。『彼らにはきっとわからないだろう』
ってね」

「で、それがどうしたんですか」

「トルストイ伯爵はそれを書いたときは未だ三十代後半のはずなんだが、東洋的な、高い正覚さとりの境涯に達しているなと思って」

「そういうもんなんですか」

「思わず雑阿含の卷第三十八、有名な僧伽藍サンカランの話思い出してね」

「ああ、来るものを飲ばず、去るものを憂えず、みたいな偈うたがありましたよね」

紀元前五世紀、現代インドのウツタル・プラデーシュ州北東部に位置するコーサラ国の都、舍衛城はサンスクリット語ではシュラーヴァステイー (Śrāvastī)、パーリ語ではサーヴァッティー (Sāvathī) と呼ばれ、漢字で音写すると室羅伐または室羅伐悉底などと表記する。

その舍衛城の郊外に祇園精舎 (祇樹給孤独園精舎) はあった。

釈迦の弟子、僧伽藍（さんからん）という名の沙門が精舎に帰って来た。その話を聞いた彼の妻は乳呑児を抱いて彼が滞在するという庵に向かう。

サンカランは妻と赤子を捨てて出家し、当時の沙門の習慣に従い、各地を遊行していたのだ。

妻は夫の健康状態も心配だったが、何より自分や子を顧みずに出て行ったことがどうしても理解できなかった。そういう無責任な人ではなかったし、子どもを愛し、可愛がつていたし、誠実で冷静で理的で、穏やかな人柄の青年だったからだ。

祇園精舎に着くと、庵にサンカランはいなかった。落胆していると、小径を経行（きんひん歩行）するその姿が見える。妻は駆け寄り、行く手を遮るように、彼の前に膝を突き、抱いている子を見せた。

「あなたは突然、家を出ていかれてしまいました。あなたはこの子をどうされるおつもりですか。

一家を養うあなたがいなくなつて、私たちがどれほどみじめな暮らしをしているか、世間でどう言われているか、あなたはお考えになったことがありますか。

それに、私はあなたのことが心配でなりませんでした。出家されて衣食住すら十分ではない暮らしをしているあなたを、ずっと心配していました。

ああ、でもやはりこの子です。ご覧になってください。

あなたの子です。そのような涼やかな顔をされ、その眸を動かそうともされないのは、いったい、なぜですか。なぜこの子を見てあげようともなさらないのですか。お願いです。

どうか、家へお帰りください。この子は、まだこんなにも幼いこの子はどうなつてしまうのでしょうか」

妻には涙さえあふれてくる。

しかし驚いたことにサンカランはそれに応えないばかりか表情変えず、眉も動かさず、そのまま通り過ぎようとする。

「では、どうぞ、この子はあなたの子ですから、あなたが養ってください。私はこの子を置いて帰ります」

そう言つて妻は径に赤子を置いた。サンカランはそれでも一瞥も与えない。誕生の日にはあれほど喜び、あんなにも愛しんでいた我が子を、土埃の上においても、まったく平静でさわやかな顔、表情は微かにさえも動揺しない。

妻はその高貴な姿に打たれた。情を超越した、これほどの境涯に達しようとは、さぞか

し修行して高みに達したに違いない。彼女は自分の軽率な行動を恥じ、子を連れて家へ帰った。

「その後、妻子がどうなったかは、何も書かれていなくてわからないんだよな」

「今じゃあり得ない話ですね。て言うか、奥さんは軽率じゃないでしょう。赤ちゃん可哀そうですよね。どうなっちゃったんだろう。」

サンカランが普通に非道な輩とは思えません」

「あり得ない非道な話だったのは、その当時の感覚で考えたって同じさ。けど、そうじゃないんだ。

ただ残酷な奴や非道な奴ならば冷笑するか逆上するか言い訳するか逃げるように立ち去るか……じゃないかな。

涼やかな平安の表情を崩さないのが凄い。

しかもその様子をあとから聞いた釈迦は『善哉沙門（彼こそ真の修行者だ）』と褒め讃えたいらしい」

「つまり人間の愛、家族の愛なんて虚しいということですか」

「いや。

否定にもならない。

虚しいというコンセプトも虚しいからだよ。落胆も絶望もまったくする必要がない。あり得ない。虚無的な、空疎な気分になる理由もない」

「なるほど。でも、うーん……」

「釈迦は虚無主義を否定していた。

あの時代は商業が発達して繁栄し、都市では価値観が大きく変わり、旧来の宗教に満足せず、自由思想家と呼ばれる修行者（沙門）がたくさんいて、大きな一派（新興宗教みたいなものか）を率いる師が幾人もいた。

その中には懐疑主義的、虚無主義的な者もいて、人間のどんな努力も意味がないと主張していたが、釈迦はそういう思想をはっきり否定していた」

「なんか、感覚的にはつながらないんですけど、まあ、真摯な努力は大事ってことですか」
「そう。」

梵天勧請って知っているかな」

「知っていますよ。

悟りを開いた釈迦が目的を達したので、そのまま入滅（死を意味する、真の涅槃）しよ

うとしたのをインドラ神（印陀羅、印欧系の神で、雷霆神。インドでは神の王、帝釈天）が制止したつていう伝説でしょ」

隆臥が瞑目しながら寸劇を演ず、

「梵天曰く、

『お待ちください。ただ独り真実の正法を抱いたままで、この世からお消えになるおつもりですか。

どうか、慈悲を賜りください。解脱へとお導きください。御仏の教え（仏教、バウツダ）を衆生にお示しください、甘露をお与えください』

けど、釈迦は応えて曰く、

『私の教えは社会の基盤を根底から覆す。

私の教えは世の習いではない。執著に囚われた者には私の見出した真の現実^{マハ・ラタ}は認識し難い』

ね。確かにそのとおりだ。

人間社会を基礎から覆す」

「うーん……生き甲斐とか、全否定ですよね。

いや、全否定ですらないのか」

「これ以上はもう、語るも虚しいよ。

私は草木や石や風や潮の声を聴けと言いたい。山岳や海の感情を読めと言いたい。古神道の清明の精神のようにね。耳を澄まし、霊性を体にしみ渡らせる。蒼穹や星辰の声をね。

兎や蛙の思弁を伺い、岩魚や翡翠の語りに耳を傾けるべきなのだ。

彼らも哲学する。苔生^{こけむ}した磐は深い思索に耽っている。朽ちかけた老木は軽やかな叡智で思惟をしている。

彼らに意志や思考や言語がないと考えるのは、人間の驕りだ。無知だね。

周波数やかたちや拡張子が根底から違うから、あたかもそれが存在しないもののように感じられるだけに過ぎない。観^{かん}ぜられるに過ぎない。

だから理窟なんか虚しい。

愛や平和と言うが、小鳥は振り向きもしない。岩も草も共感しない。風も向きを変えないし、波も勢いを変えない。台風も進路を転じないし、雨も降らない。

人間だけの『ごっこ』なのさ。実在じゃない。

そういうことだよ。理窟じゃない。

理窟を超えた直観で考えなくっちゃいけない。

そもそも理窟なんて、生存が用意した執著を起こすためのネタ、生存の罠に過ぎないからね。

理性は本能の枝葉に過ぎない。自己肯定のためのアリバイ作りに過ぎない。

ただげんじつのみたるかな
『只管現實焉爾已哉おも兮駕。』

人、義しきと以おもふを爲すよし』

（『人間存在の實存的分析による存在論考―「空」』より抜粋） ってことさ」

♡
善哉沙門♡
♡ !!